

雨がやまない

寺本 実

雨がやまない。朝から空が見渡す限りの黒雲で覆われている。調査村へ向かうため、食堂で借りた雨合羽を着る。少し汗くさいが背中のリュックもカバーできる。つぎに、これもお借りしたピンク色のやや小さめのヘルメットをかぶる。筆者は顔が大きい。鏡を

見ると巨大なナスビのようだ。二〇一〇年九月の終わりから一〇月前半にかけてベトナムの中部に位置するクアンチ省に枯葉剤被災者の生活調査のため滞在した。同省はベトナム戦争時に南北ベトナムを分けた北緯一七度線のすぐ南という最前線に位置したため、激戦の地となった。

宿所から調査村までバイクで約二〇分かかる。初日以外はすべて雨。訪問先のご家庭に着くと、脱いだ雨合羽を置く場所をまず探す。インタビューを終えると、また雨合羽を着てつぎのお宅へ向かう。その繰り返しとなった。中部の方言に慣れていないこともあったが、雨が屋根を叩く音でせつかくの応答が聞きとれず、身乗り出すこともしばしば。村人が育てた稲は水に没してしまい、調査村からラオス国境寄りの土地では洪水により死者が三人出たとテレビで報じていた。

調査を終えてハノイに戻る日が来た。事前に寝台車のチケットを購入してあった。午前中に調査村が位置する県の専門機関でインタビューを終え、午後にはクアンチ省の中心地ドンハーへ。昼を挟み、午後一番で省レベルの専門機関でお話をうかがった後、駅に向った。調査に協力いただいた

Dさんによれば、通常は寝台車で一晩眠れば起きた頃にハノイに到着する。しかし、この日は線路が雨で水没している箇所があり、途中下車してバスに乗り換え、さらに浸水地の向こう側で待つ列車に乗り換える必要があった。

夕方四時五〇分頃、三〇分ほど遅れて列車が到着した。雨が降り出すなか、大きな荷物を抱えて乗車を待つ。力を込めてステップを踏み、車内に。チケットに記された場所に行くと、四人部屋の寝台で、背筋を伸ばして座ることができた。列車がソロリと動き出す。雨に浸かり、湖と化した田んぼが薄暗がりの中に見える。小舟で移動する人たちがいる。頼りなげな電柱が水の中を綱渡りしている。もし電線が切れて水につかかってしまったら……。怖い想像が頭をよぎる。

ほどなく最初の下車地へ。居並ぶバスの間できた小道を抜けて、バスに乗り換える。後部座席にもぐりこんだ。座席が狭くて足を折りたためない。やむなく左足を通路に投げ出す。バスが走り出した。前に目を向けると、あれ、ドアが閉まらない。走行中も近くの男性がドアを閉めようと何度も試みるが不可。携帯電話で知人に状況を連絡する人はいたものの、沈黙が続く。するとおばあさんが通路を挟んでやや離れて座っていた青年に「あんだ、窓を閉めて」。窓（ドアではない）は静かに閉められた。

夜八時四〇分頃、バスは浸水地を抜けてつぎの列車乗車地に到着した。また荷物を運び、慌てて乗車する。今度は選択の余地なく六人部屋だ。天井が低く、前傾姿勢でしか座れない。一時間待っても動かず、あきらめかけた頃に列車は動き始めた。

その日のメモに筆者はこう記している。「移動でベトナムの人たちも疲れていたのか、文句も言わず、黙々と状況に従っている方が多かった。c h i u (我慢) することに慣れているということ

か。ベトナムの人たちの我慢強さを感じた」。ベトナムは自然災害が多い国である。毎年数千人が自然災害で命を落とす。特に中部は毎年被害が大きい。ベトナム紙によれば、二〇一〇年一月〜一月にかけて大雨、洪水が続いたベトナム中部の被害は、死者一五五人、行方不明者二九人、被害総額は一一兆六〇〇億ドンに達した。

自然災害とともに、長期にわたる戦争を経験してきたベトナムでは、日本の東日本大震災の犠牲者、被災者の心情を、身をもって感じ、理解できる人が、少なくないと思われる（震災発生数日後、ベトナム赤十字はベトナム国民に対して日本の被災者支援の呼びかけを開始した）。

翌朝、余り眠れないまま、列車はハノイ駅に到着した。何事もなかったように、乗客たちは街に溶けていった。



てらもと みのる／アジア経済研究所東南アジアII研究グループ

専門は、ベトナム地域研究。主な著作に『現代ベトナムの国家と社会一人々と国の関係性が生み出す〈ドイモイ〉のダイナミズム』（編著、明石書店、2011年）、「ベトナムの障害者の生計—外部環境とのかかわりについての事例調査を通した考察—」（森壯也編『途上国障害者の貧困削減—かれらはどう生計を営んでいるのか—』岩波書店、2010）など。